

2005年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果

宮重 徹也*

Objectives and Effects of Miyashige Seminar Camp in 2005

Tetsuya MIYASHIGE

目次

1. はじめに
2. 2005年度卒業研究ゼミ合宿の概要
3. 卒業研究報告会の目的と効果
4. 株式会社資生堂本社 CSR 部への企業訪問の目的と効果
5. おわりに

Abstract

This paper is Camp Report of Miyashige Seminar in 2005. Students joining my seminar had a debrief session about their study and they visited to Shiseido Co.,Ltd.

1. はじめに

筆者は自身の専門分野を経営戦略にしているため、富山商船高等専門学校国際流通学科における筆者の卒業研究ゼミナールでは、経営戦略に関連するテーマの卒業研究に取り組むことになる。経営組織や企業倫理（企業の社会的責任：CSR）などに関連するテーマの卒業研究に取り組むことも可能であるが、これらのテーマに対しても経営戦略からのアプローチを採用することになる。

経営戦略は競争力を持つ企業の特徴を明らかにしようとする学問であるが、現在の主要な理論研究では、その競争力の源泉を企業内部に求める理論が主流となっている。例えば、ジェイ・バーニー（Jay B. Barney）は競争力の源泉を企業内部の希少かつ模倣困難な「リソース（resource）」や「ケイパビリティ（capability）」に求めるリソース・ベースド・ビュー（Resource Based View）を提唱しており⁽¹⁾、ゲイリー・ハメル（Gary Hamel）とプラハラード（C. K. Prahalad）は競争力の源泉を企業内部の「コア・コンピタンス（core competence）」に求めるコア・コンピタンス経営を提唱している⁽²⁾。また、野中郁次郎と竹内弘高は

競争力の源泉を企業内部で新たな知識が創られる「知識創造」に求めており⁽³⁾、ピーター・ドラッカー（Peter F. Drucker）は知識という第一義的な資源を担う企業内部の「知識労働者」に求めている⁽⁴⁾。筆者自身もこのような理論研究に基づいて、医薬品企業の競争力の源泉を企業内部の「倫理的企業文化」に求めた実証研究をまとめている⁽⁵⁾。

筆者のゼミナールでは、このような理論研究に基づいて、現実に即した論理の明快な卒業論文の作成を目標としているが、学生たちは企業内部に直接触れる機会が少ないため、企業内部に存在する企業文化（社風）などの概念を暗黙知として理解できない状況にある。そのような中で、2003年度後期の流通ゼミナール（プレ卒業研究）において、国際流通学科5期生のゼミ生から、研究対象である企業の内部に直接触れる機会を設けて欲しいとの要望があった。

そこで、ゼミ生たちの要望に基づいて、2004年度から卒業研究報告会と企業訪問を含むゼミ合宿を実施することにした⁽⁶⁾⁽⁷⁾。本稿では特に2005年度の卒業研究報告会と企業訪問について報告する⁽⁸⁾⁽⁹⁾。2005年度の卒業研究報告会と企業訪問の目的は、それぞれ次の通

*国際流通学科

りである。

まず、卒業研究報告会の目的は、論理の明快な卒業論文を作成するために、提出期限までの時間に余裕のあるこの時期に、卒業研究の論理の明快でない箇所を見直すことにある。従って、この報告会では報告学生は自分の研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理の明快でない箇所や不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を通して、各自の卒業研究の論理が明快となるように見直していく。

続いて、企業訪問の目的は、企業内部に直接触れて、企業内部に存在する企業文化（社風）などを肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を習得することにある。すなわち、このような経験によって、これまでの形式知を教授する文献や講義だけでは習得できていなかった企業文化（社風）などの概念を暗黙知として習得することを目的としている。特に資生堂は日本企業のなかでは積極的に企業倫理の浸透を目指している企業であるため、その倫理的企業文化を肌で感じてもらうことを目的とした。また、学生は将来的に企業へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも倫理的企業文化に触れてもらうことを目的とした。

本稿では、2005年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、このような目的の効果が得られたのかについて、学生たちから提出されたレポートを中心に検証していく。なお、レポートは、「卒業研究報告会に参加した感想」、「株式会社資生堂本社 CSR 部を企業訪問した感想」をそれぞれ提出してもらった。

2. 2005年度卒業研究ゼミ合宿の概要

本章ではゼミ合宿の概要をまとめておく。2005年度ゼミ合宿は7月24日から25日までの1泊2日で、5年生のゼミ生7名の参加のもとに実施した。

夏休み期間中ということもあり、1日目は避暑地である野反湖を訪問し、野反湖を散策した後、花敷温泉の温泉旅館において、5年生の卒業研究報告会を行った。2日目は午前中に東京・汐留に移動し、午後から株式会社資生堂本社 CSR 部を企業訪問させて頂いた（表2-1、写真2-1参照）。

表2-1 2005年度ゼミ合宿の日程表

○7月24日（日）		
富山	— JR 北陸本線・北越急行線 —	越後湯沢 / 越後湯
6:45	はくたか1号	8:41 / 9:14
沢	— JR 上越新幹線 —	高崎 / 高崎 — JR 吾妻線 —
Maxたにがわ434号	9:45 / 10:41	普通

長野原 / 長野原駅	— JRバス・花敷線 —	花敷温泉 / 花敷温泉
12:04	/ 12:37	13:07 / 13:12
JRバス・花敷線	—	野反湖
7/21~8/21運行		13:53
野反湖のニッコウキスゲを散策		
野反湖	— JRバス・花敷線 —	花敷温泉
15:06	7/21~8/21運行	15:47
花敷温泉の旅館で卒業研究報告会		
○7月25日（月）		
花敷温泉	— JRバス・花敷線 —	長野原駅 / 長野原
9:50		10:20 / 10:50
JR 吾妻・高崎線	—	上野
草津4号		13:19
14:30~16:00 株式会社資生堂本社 CSR 部 企業訪問 新橋駅で解散		



写真2-1 ゼミ旅行の風景

3. 卒業研究報告会の目的と効果

本章では、卒業研究報告会の目的とする効果を得られたのかについて、学生たちから提出された「卒業研究報告会に参加した感想」のレポートを中心に検証をしていく。

宮重ゼミでは、4年後期の流通ゼミナール（プレ卒業研究）から、卒業研究の論理性について学習を進めているが、5年生の夏休みの時点で卒業研究の論理が明快となっている学生は少ない。そこで、卒業研究報告会における目的は、前述の通り、論理の明快な卒業論文を作成するために、提出期限までの時間に余裕のあるこの時期に卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所を見直すことにある。従って、この報告会では報告学生は自分の研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理的に明快でない箇所や論理の不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を

通して、各自の卒業研究の論理が明快となるように見直していく。

7名の5年生の卒業研究のテーマは表3-1の通りである(写真3-1, 3-2参照)。なお、2005年度の宮重ゼミは、筆者の内地研究派遣(2005年8月1日~2006年2月末日)に伴い、2005年7月末日をもって解散した。研究途中からの研究指導をお引き受け頂いた国際流通学科の先生方には厚く御礼申し上げたい。

表3-1 卒業研究報告会の報告内容

報告時間	報告者氏名	報告タイトル
16:00~16:30	伍嶋沙友里	M&A成功の条件
16:30~17:00	尾谷真樹	外資系企業の進出と雇用形態の変化
17:00~17:30	新田久美子	正規社員の雇用と競争優位
17:30~18:00	細井良子	富山港線路面電車化とそれに伴うまちづくり
20:00~20:30	庵谷佳奈江	ドラッグストアにおけるフランチャイズ・システム導入
20:35~21:10	吉田明日香	企業の海外進出における成功要因
21:25~22:00	加藤 慈	多国籍企業の現地化と企業利益

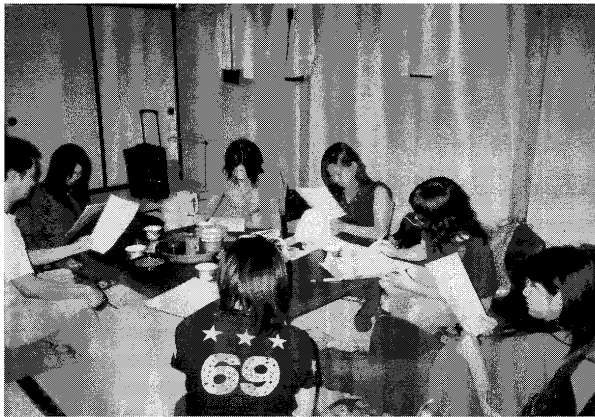


写真3-1 卒業研究報告会の風景(1)



写真3-2 卒業研究報告会の風景(2)

続いて、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたのかについて、学生たちのレポートから検証していく(表3-2参照)。

表3-2 卒業研究報告会に参加した5年生のレポート

(国際流通学科5年 庵谷 佳奈江)

この議論は、学生一人一人が卒業研究の枠組みを発表し、その発表を受けて、教官や他の学生が質問や意見を述べ合うという形式で行われた。

私たちのゼミでは、雇用形態、M&A、まちづくり、多国籍企業について研究を進めている学生がいる。テーマの方向性が異なれば、論文の展開方法や必要となる知識も異なってくる。しかし、「理論」というのは、私たちがどのようなテーマで研究を進めていても、議論を交わすことのできるものだと感じた。

私の発表は、7人中の5番目ということで後半だった。他の学生の発表を受けての、教官の質問を聞いているうちに、その質問内容が、自分の論文においてもあてはまるのではないかと思った点が、多々あった。また、私たち学生は、発表するだけではなく、他の学生への質問もしなければならないという議論上のルールがあった。だから、論文が主観的に展開されていないか、論理的な根拠に基づいているかどうか、細部まで聞く必要があった。そうして、自分の頭で考え、理論というものを理解していけるようになるのだろう。

私は、「フランチャイズ・システムの発展過程~ドラッグストアにおけるフランチャイズ・システムの導入」というテーマで卒業研究を進めている。その研究の第3章で、他業界におけるフランチャイズ・システムの導入について、述べる章がある。自分では、小売業、サービス業、外食産業の3つの業界を挙げて、第3章を進めていこうと考えていた。しかし、ドラッグストア業界は、小売業の中の1つであり、私の論文で小売業、サービス業、外食産業の先行事例を挙げるのは、不適切であるとの指摘を受けた。

私の論文には、まだまだ足りない部分がたくさんある。しかし、今回の議論で自らがいろいろ質問し、また質問や指摘をもらうことによって、論文の完成に一歩近づけたのではないかと思う。私にとって、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。

(国際流通学科5年 尾谷 真樹)

ゼミ旅行の日が近づくにつれて、私はとても焦っていました。その理由は、自分の卒業研究が思うように進んでいなかったからです。このままだとゼミのメンバーの前で発表できないとさえ思っていました。しかしゼミ旅行が終わった今思い返してみると、ゼミ旅行に参加して本当によかったと思っています。

一人で卒業研究を進めると、自分の論文の枠組みがあやふやになってしまうことがあります。今回、ゼミのメンバーの前で自分の研究の内容を説明することで、自分の論文の枠組みを再確認することができました。そして、あれほど卒業研究に対して焦っていた自分はずなのに、人に研究内容を伝えることができたことで、さらに卒業研究へのやる気が出てきました。また、ゼミのメンバーと自分の研究に関して議論をすることにより、一人で研究する中で気づけなかったことも知ることができました。また機会があれば、積極的にメンバーと卒業研究の報告を行いたいと思いました。

(国際流通学科5年 加藤 慈)

普段は研究を自分で進めているため、他のゼミ生の研究内容について聞く機会はあまりなかったが、今回の発表会ではそれを聞くことができた。

発表では、自分の研究以外の研究内容について予備知識があまりなかったため、理解しがたい部分もあったが、自分の研究にも当てはまる議論が多かった。また、自分の発表に対しなされる指摘は、特に定義や理論の部分など研究の土台となるものについてであり、それらは的確で、それにより研究の詳細を見直すことができた。

まだ課題は多いがこの議論によって考えを深めることができた。自分だけで研究を進めることも大切だが、定期的なこのように議論をする機会を持つことも重要だろう。自分では気付かなかったことを指摘されることは多々ある。この7月で本ゼミは解散し、集まることもなくなるのだろうが、時には他のゼミ生と意見を出し合い、互いの研究にまた活かせたらと思う。

(国際流通学科5年 伍嶋 沙友里)

研究報告を聞いて、自分の研究も含め今から特に大変なのは実証研究における企業の選定だと感じました。研究の内容や社会での評価など選ぶにふさわしい合理的理由、また実際に選び調べていくうちに仮説と異なる結果がでるかもしれないということもあります。早く取り掛かるべきだと思います。

また卒研は1人1人なので、発表の場がないと恥ずかしかったり進んでいなかったりで、人に見てもらうことがあまりないです。今回、報告することで自分の研究が他の人から見てどんなところが疑問になるかなど知ることができました。また同じ研究内容じゃなくても情報や資料の交換などにもつながったのでよかったです。これからは、友達に見てもらえるくらいの余裕をもって進めていけたら良いと思います。

(国際流通学科5年 新田 久美子)

今回の報告会は、お互いに発表しあい、またいろんな意見やアドバイスも交わすことが出来たので、それぞれにとってとても有意義な報告会になったと思う。普段は、みんなが研究を進める中でまとめた文献や論文のレポートの報告しか聞く機会がなかったため、今回は、みんながどのような研究をどのような形で進めているのかがわかり、より理解が深まった。そして、報告の中で、実は自分の研究内容と重なる部分があったり、自分が知っていることで、アドバイスできる部分があったりと、新たな発見があった。

報告を始める前までは、自分の発表すらままならない状態で、その上、みんなの研究に意見なんて出来ないだろうと思っていた。しかし、いざ報告会を始めると、それぞれの研究がとても興味深いもので、みんなが質問や意見を積極的に言っていたので有意義な報告会になった。夕食までに終わる予定でいた報告会だが、途中で夕食をはさむことになり、長時間にわたる報告会となった。

今後もそれぞれが研究を進めていき、困った時にはお互いにアドバイスをしあいながら、今よりも高いレベルのものを報告し合えれば良いと思う。

(国際流通学科5年 細井 良子)

私はゼミ合宿を終えて、卒業研究をひとつ仕上げることの難しさを改めて感じました。私はまず論理的に書かれているということを理解するため「イノベーションのジレンマ」を読みました。始めは読んでいても難しく、理解できなかったのに読んでいくうちに「論理的に書かれている」

ということを理解できるようになりました。そして、自分の卒業研究の枠組みもあまり苦労することなく完成させました。資料も少しずつでも集まり始めて、私は文章を書き始めました。まず、研究の背景・目的・方法を明らかにし、先行事例を書き始めました。先行事例の一つ一つも背景から結論に至るまでつながりがわかるように書きました。

やっと本論を書こうとしたときに、自分の中でいつの間にか、「これを書けば話はまとまって、先行事例ともつながる。だからこの結論にもつながる。」ということばかりに気をとられて、本当に自分の研究したい内容を見失いました。私は、自分の本当に研究したいことを随時確認しながら、それを見失わず、自分の納得いく卒業研究を行いたいと改めて思いました。

(国際流通学科5年 吉田 明日香)

今回の報告会に参加して、これまでの学校のゼミとはひと味違った雰囲気の中で発表することができ、とても勉強になった部分がたくさんあった。教官からの指摘やアドバイスからだけではなく、それぞれテーマは違っても、同じ「卒研」を取り組む仲間からの視点や考え方も参考になり、共感できる部分が多かった。普段、あまり自分の研究について人と話す機会がなかったが、今回のように議論していく中で、見えてくるものもたくさんあるのだと思った。

また、自分の研究テーマを改めてじっくりと見直し、考え、「まだまだ力不足」という現実も思い知らされたが、それ以上に、「もっとこうしよう」という前向きな思考に変わったと思う。これは、自分の中ではとても大きな変化であり、また、今後研究を進めて行く中で、とても重要になると思う。

今回学び、そして仲間や教官からもらったアドバイスを参考に、今日からまた気持ちを新たに自分の研究を進めていきたいと思う。

この表3-2から、ゼミ生7名が、各自の卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所に気付いたことが示され、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことが明らかとなった。

4. 株式会社資生堂本社 CSR 部への企業訪問の目的と効果

本章では株式会社資生堂本社 CSR 部における企業訪問の概要を述べた後、企業訪問の目的とする効果を得られたのかについて、学生たちから提出された「株式会社資生堂本社 CSR 部を企業訪問した感想」のレポートを中心に検証する。

宮重ゼミでは、ゼミ合宿2日目の2005年7月25日(月)14時30分から1時間30分にわたって、資生堂本社 CSR 部を企業訪問させて頂いた。資生堂は日本で最大手の化粧品企業であるとともに、日本企業のなかでは積極的に企業倫理の浸透を目指している企業であるため、今回は企業倫理担当部署(CSR部)を企業訪問させて頂いた(表4-1, 写真4-1, 4-2参照)。なお、資生堂は2002年と2004年に経営倫理実践研究センター(BERC)から経営倫理最優秀努力賞を

受賞している企業である。

企業訪問の目的は、前述の通り、企業の内部に直接触れることにより、企業内部に存在する企業文化（社風）など文献や講義からは得ることの難しい暗黙知を習得することである。特に資生堂は日本企業のなかでは積極的に企業倫理の浸透を目指している企業であるため、その倫理的企業文化を肌で感じてもらうことを目的とした。

表4-1 企業訪問の内容

歓迎のあいさつ (CSR部 中村正寛様、深井秀治様、渡部麻美様) 資生堂の企業倫理活動について (CSR部参事 中村正寛様) 質疑応答 (CSR部 中村正寛様、深井秀治様、渡部麻美様)



写真4-1 資生堂への企業訪問風景 (1)



写真4-2 資生堂への企業訪問風景 (2)

続いて、資生堂に企業訪問させて頂いた学生たちのレポートから、資生堂への企業訪問の目的とする効果が得られたのかについて検証していく(表4-2参照)。

表4-2 資生堂へ企業訪問した学生のレポート

<p>(国際流通学科5年 庵谷 佳奈江)</p> <p>私たちは、資生堂のオフィスを訪問し、資生堂の企業倫理推進への姿勢と取り組みについて、学ばせていただいた。オフィスに入っすぐ、雰囲気落ち着いていると感じた。それは、きっと資生堂という企業が、人に優しく、人をとても大切にしている会社であるからだと思った。ここでいう「人」というのは、『THE SHISEIDO WAY』に記されている、「お客様」、「取引先」、「株主」、「社員」、「社会」であり、私はその中で最も大切にされるべき人は社員だと思った。もちろん、社員以外は大切にしくなくてもいいというわけではない。これまで、どちらかという、企業外部のステークホルダーを重要視していた企業が多いと思うが、これからは、内部のステークホルダーにも目を向けなくてはならなくなってきたのだと感じた。それは、社員が、資生堂とステークホルダーとのパイプ役だからである。だからこそ、企業倫理委員会を設置し、『THE SHISEIDO CODE』や『資生堂企業倫理白書』の刊行、研修などを行い、熱心に、より倫理的な企業を目指しているのだろうと思った。</p> <p>私は、実際に企業を訪問させていただき、そして企業倫理推進への姿勢と取り組みについて、実際に話を聞かせていただいたのは、今回が初めてだった。だから、資生堂以外のほかの企業が、企業倫理推進のためにどのような活動を行い、現在どのような段階まできているのか詳しくはわからない。しかし、この資生堂見学に参加して、企業倫理というものに興味を持つようになり、倫理とは?と考えるようになった。自分が将来就職して、企業で働くようになると、企業倫理と無関係ではいられなくなるので、とてもよい機会になったと思う。</p> <p>(国際流通学科5年 尾谷 真樹)</p> <p>資生堂本社の見学では、まずよい会社とは何かということを知りました。従来は業績のよい会社とよい会社とされてきましたが、現在、今後は業績がよいことに加えて、社会に役立つ会社が必要とされていると聞きました。そのことから近年、企業のCSRが注目されているとも話していました。資生堂でも1997年から資生堂CSRレポートを通してステークホルダーに情報開示をしているそうです。</p> <p>資生堂には企業理念をしっかりと実現させるために、THE SHISEIDO WAYとTHE SHISEIDO CODEがあります。企業理念を掲げている企業はたくさんありますが、これほど企業理念を真剣に全社員に浸透させようとしている企業はないのではないかと思います。</p> <p>今回、資生堂という日本を代表する企業を見学し、大変貴重な経験をすることができました。また、資生堂のCSRの取り組みについて詳しく知ることができ、他の企業はCSRについてどのような取り組みをしているのかとても興味を持ちました。私の卒業研究では、企業のCSRについての取り組みは研究対象ではないのですが、卒業研究以外で研究してみたいと思いました。</p> <p>(国際流通学科5年 加藤 慈)</p> <p>今回の企業訪問では、企業倫理を中心としたお話を伺った。</p> <p>当社では、企業の性格を「業績重視」から「社会に役立つ会社」へ転換し、CSR活動に力を入れ、顧客や株主はもちろん、地域住民や行政などを含む社会とともに企業活動を行っている。</p>

企業活動を適切に行うため、つまり企業倫理を推進するために、当社では様々な措置が採られている。まず、コンプライアンスは当然として、その上に企業価値の向上を目指している。そして、企業理念とTHE SHISEIDO WAYを実現するために具体的な企業倫理・行動基準、資生堂CSR活動の基本であるTHE SHISEIDO CODEというものを制定している。このTHE SHISEIDO CODEは、当社が進出している外国でも採用されており、これが企業活動の指針となっている。その他にも企業倫理研修などの企業倫理活動を行っている。

このような企業倫理を推進する様々な努力の結果、経営倫理優秀努力賞を受賞するなど企業価値を高めることとなった。現在では多くの企業がCSR活動を行っているが、当社のように企業に大きな影響と結果をもたらした企業はそう多くはないであろう。それはもちろん当社の努力の結果である。今後も、「社会に役立つ会社」としての資生堂のさらなる企業価値の向上が期待される。

(国際流通学科5年 伍嶋 沙友里)

資生堂の企業倫理活動についてお話を伺いました。

従来よい会社とは業績のよい会社でしたが、現在また今後はプラス社会に役に立つ会社でなくてははいけません。そのために資生堂CSR部では、コンプライアンス・企業価値の向上を目指しておられます。

まず企業理念を実現するためにTHE SHISEIDO WAYがあります。これはステークホルダーを顧客・取引先・株主・社員・社会の5つに分け、企業理念に基づきステークホルダーに対して資生堂がどうあるべきかを示されています。

WAYをさらに具体化したのがTHE SHISEIDO CODEです。97年に企業倫理委員会の設置後、スタンダード版(英語)を作成し、スタンダード版と国の法律を考慮した15カ国それぞれのCODEが作られました。最初にスタンダード版を作成するのは国際的に活躍されている企業ならはだと思いました。

企業理念を徹底するための仕組みとして、特に気になったのがコードリーダー制です。コードリーダーは各職場で企業倫理活動を促す・報告するといった役割を担い約600名います。企業倫理を促す役割がはっきりしていて、浸透させる力が強いと思います。他にも、議論の「場」を大切にすること、啓発・情報発信、モニタリングなどがありました。

CSR、企業倫理など最近注目されていることについて、資生堂の方から直接教えていただくことができとても勉強になりました。

(国際流通学科5年 新田 久美子)

今回会社訪問をさせていただいたのは、資生堂の東京本社である。オフィスは汐留の日本テレビの隣のビルにあり、とてもきれいだった。私達を迎えていただき、資生堂の会社説明をしてくださったのは、CSR部の中村さんだった。

資生堂は、化粧品で有名ということもあり、働いている約7割、お客様の約9割が女性である。このような環境にあるせいか、資生堂では女性が働きやすい仕組みをとっているようだ。他にも、より良い会社であるための工夫がたくさんあるようだ。従来の良い会社とは、業績の良い会社であったが、現在は従来プラス社会の役に立つ会社だそうだ。そのため、資生堂は他社よりも比較的早い段階からCSR部を設立し、より良い会社環境や社会での資生堂の在り方を考えてきているという。そのような資生堂の在り

方を示したものが、「THE SHISEIDO WAY」であり、「THE SHISEIDO CODE」である。お客様・取引先・株主・社員・社会を大切にすることが、資生堂の企業使命であり、企業理念であるようだ。そして、この理念や倫理を会社の隅々まで浸透させていくように活動しているのが、中村さんを含むCSR部の仕事だそうだ。

最近ではほとんどの会社が企業理念を掲げているが、これはただ掲げるだけでは意味がないのだ。これを掲げて会社に浸透させることが大切だが、時間がかかり数字では評価しにくいから、とても難しいといわれている。しかし、資生堂では明確な理念を掲げ、それを会社の隅々まで浸透させる仕組みが多々あるようなので、これから長い時間をかけて是非今以上にすばらしい会社になればいいと思う。私も資生堂の商品を愛用させていただいているので、今回の訪問で資生堂の素晴らしさを詳しく知ることができ、とても充実した時間を過ごすことが出来た。

(国際流通学科5年 細井 良子)

私は今回初めて企業見学に参加しました。そこで今まであまり意識したことがないCSR(企業倫理)について資生堂に話を聞くことができました。資生堂と言えば、やはり化粧品が有名で、私も個人的に同社の化粧品を使用しているので、一顧客としてもとても興味がわきました。私は、資生堂CSRレポート2005を読んで、改めて資生堂という会社はしっかりしていると感じました。私がとても関心を持ったのは、啓発活動です。企業倫理を社内に根付けるため、きめ細やかな研修や啓発誌「コードレター」、企業倫理委員会ホームページ、企業倫理関連ビデオライブラリーなどとたくさんの活動を行っており、会社の土台をしっかり築いているなと思いました。そのほかに資生堂に魅力を感じたのは、肌の弱い人でも安心して使えるよう、研究者も自らも敏感肌で、その体験を生かして化粧品の開発にあたっていました。私は、当事者の目線に立って研究を行っているという、その姿勢がすばらしいと思いました。そして何よりも「資生堂エコポリシー」という環境保全のための活動を行っていることがすばらしいと思いました。これらが、資生堂が多くの人に支持される理由なのだと思えました。

(国際流通学科5年 吉田 明日香)

資生堂は7割の従業員の方が女性だと聞いていたし、普段、化粧品などで身近に感じる会社だったので、とても興味があつた。また、今回は、資生堂のCSRレポートを中心にお話していただいたが、私は卒研のテーマで少しCSRについて調べていたので、実際に企業の方からお話が聞けるいい機会になった。

よりよい企業を目指して、企業内ではさまざまな取り組みがなされている。資生堂での取り組みで印象に残ったのは、従業員に対するきめ細やかな対応である。女性従業員が多いからだけでなく、資生堂のCSR活動としてさまざまな制度が組み込まれていて、働きやすそうなイメージだった。特に企業倫理活動を担うコードリーダー制の徹底や、それに伴う研修・懇談会の開催、相談窓口の設置など、分かりやすく、また目に見える活動が多いことも、従業員や社会からの理解を得ることができる一つのポイントではないかと思う。

海外への取り組みはまだ進行途中であるそうだが、今後、もっともっと企業のグローバル化が進めば、いっそう企業のCSR活動は重要になってくると思う。その中で、資生堂でもまさに「これから」といわれた課題を、日本と同様

に海外でも取り組んでほしいと思う。また、今、世界中で深刻化している環境問題についても積極的に取り組んでほしいと思った。

この表4-2から、資生堂本社CSR部への企業訪問において、社員の方々や会社の様子などに直接触れることによって、資生堂の企業倫理に対する考え方や取り組みを全ての学生が肌で感じることができており、企業倫理やCSRに興味を持つだけでなく、文献や講義からは得ることの難しい倫理的企業文化の概念をつかむことができたことが示された。従って、企業の内部に直接触れることにより、企業文化(社風)など文献や講義からは得ることの難しい暗黙知を習得するという目的の効果が得られたことが明らかになった。特に今回の企業訪問では倫理的企業文化を肌で感じることを目的としたが、その目的は十分に達成されたといえる。

更に、自分が企業で働く場合に、企業倫理とは無関係でいられなくなることを実感した学生や、女性が働きやすい企業であることを感じた学生がいることも示され、資生堂の倫理的企業文化を働く場所としても理解するという目的の効果が得られたことが明らかになった。

従って、学生たちから提出されたレポートに基づいて、資生堂本社CSR部への企業訪問の目的とする効果は十分得られたことが検証された。

5. おわりに

本稿では、2005年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、ゼミ合宿の目的とする効果が得られたのかについて、学生たちから提出されたレポートを中心に検証してきた。

卒業研究報告会の目的は、報告学生が自分の卒業研究を論理的に説明し、報告を受ける学生が論理的に明快でない箇所や論理的に不完全な箇所を指摘する過程を通して、各自の卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所を見直すことであった。

第3章において、学生は卒業研究の論理の明快でない箇所に気付いたことが示されており、目的とする効果が得られたことが明らかになった。従って、卒業研究報告会は目的とする効果を十分に得たといえる。

続いて、企業訪問の目的は、企業内部に直接触れることにより、企業内部に存在する企業文化(社風)など文献や講義からは得ることの難しい暗黙知を習得することであった。また、学生たちは将来的に企業へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業文化を理

解することを目的とした。

第4章において、資生堂本社CSR部への企業訪問から、社員の方々や会社の様子などに直接触れることによって、資生堂の企業倫理に対する考え方や取り組みを全ての学生が肌で感じることができており、文献や講義からは得ることの難しい企業文化(社風)、特に倫理的企業文化という暗黙知を習得できたことが示され、目的とする効果が得られたことが明らかになった。

また、自分が企業で働く場合に、企業倫理とは無関係でいられなくなることを実感した学生や、女性が働きやすい企業であることを感じた学生がいることも示され、資生堂の倫理的企業文化を働く場所としても理解するという目的の効果が得られたことが明らかになった。

従って、2005年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、このゼミ合宿の目的とする効果が十分に得られたことが検証された。なお、学生による文章は誤字・脱字を含めていずれも原文のまま掲載した。

謝辞

今回の企業訪問にあたり格別のご配慮を頂きました経営倫理実践研究センターの岡部幸徳先生、株式会社資生堂CSR部部長の桑山三恵子様、CSR部参事の中村正寛様、CSR部の深井秀治様、渡部麻美様に厚く御礼申し上げます。

注

- (1) Jay B. Barney, *Gaining And Sustaining Competitive Advantage*, Prentice Hall, 1997. (岡田正大訳『企業戦略論【上】』, ダイアモンド社, 2003, pp.250-271.)
- (2) Gary Hamel and C.K. Prahalad, *Competing for Future*, Harvard Business School Press, 1994. (一条和生訳『コア・コンピタンス経営』, 日本経済新聞社, 1995, p.260.)
- (3) Ikujiro Nonaka and Hirotaka Takeuchi, *The Knowledge-Creating Company*, Oxford University Press, 1995. (梅本勝博訳『知識創造企業』, 東洋経済新報社, 1996, pp.352-355.)
- (4) Peter F. Drucker, *Managing in the Next Society*, Griffin, 2002. (上田惇生訳『ネクスト・ソサエティ』, ダイアモンド社, 2002, pp.178-184.)
- (5) 宮重徹也『医薬品企業の経営戦略-企業倫理による企業成長と大型合併による企業成長-』, 慧

文社, 2005, pp.86-121.

- (6) 宮重徹也「2004年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第39号, 2006, pp.47-54.
- (7) 宮重徹也「研究室紹介記事－富山商船高等専門学校国際流通学科助手－宮重徹也（経営戦略）研究室」『高等専門学校の教育と研究』第11巻第4号, 2006, pp.33-43.
- (8) 宮重徹也「2005年度ゼミ合宿の報告－卒業研究報告会と株式会社資生堂への企業訪問－」『経営倫理』第47号, 2006, pp.8-9.
- (9) Tetsuya Miyashige, "Business Ethics Education by Company Visitation," *2006 Japan-Taiwan International Conference on Engineering Education and International Exchange Proceedings*, 2006, pp.15-18.